

神奈川県立図書館の特徴的な装丁の資料

日比野 悠志

はじめに

神奈川県立図書館（以下「当館」という。）では、「ベストセラーズ文庫」や「雑誌創刊号コレクション」など、さまざまなコレクションを構築しているが、それらは内容、過去の所有者、時代などに共通性のあるもので構築されており、本の素材や、見た目に観点をおいたものはない。しかし、当館には齋藤昌三のいわゆる「ゲテ本」をはじめとした、特徴のある素材、見た目の装丁を施されている資料が多く眠っている。本稿では、その個性あふれる資料を紹介していく。ただし、素材などについては特殊なものであっても、その点が明記されているものは多くなく、筆者の推測が多分に含まれることをご理解いただきたい。装丁に関して断定している部分は、資料そのもの、もしくは参考資料に記述があるものである。また、候補となる資料の多さから「かながわ資料／新聞雑誌室」で保存している地域資料や雑誌は対象としていないため、著名であっても取り上げていない資料もある。

文中には、装丁に関する様々な用語が出てくるため文中での解説は行わず「用語の解説」を文末に付しておく。

1 日本における装丁の洋装化と限定本の登場

現在、当館で所蔵している本や一般の書店で目にする大半の本は洋装本である。

日本では明治維新と共にパルプを原料とする洋紙がつくられるようになりお雇いの外国人教師によって洋式の製本技術も伝えられたが、1875（明治10）年頃までは刊行されるものはほとんど和装本であった。官庁の出版物はお雇い顧問の意向もあり洋本仕立てにはなっていたが、材料は舶来品で賄われていた。

国産の洋装本は1875（明治10）年、秀英舎（のちの大日本印刷）刊行の『改正西国立志編』が日本で初となる¹⁾。これ以降、装丁様式も洋風が変わっていき、多色刷り木版口絵や、総クロス装などが登場した。そんな中で、装丁を手掛けていた尾崎紅葉や橋口五葉などの活躍もあり、明治末期から1923（大正12）年の関東大震災にいたるまでの時代は日本近代装丁史上の黄金期にあたるとも言われている²⁾。

明治末期には、印刷・装丁の材料は、ほとんど国産で賄えるようになっていたが、ブッククロスはまだ輸入に頼っていた。第一次世界大戦で入手が困難になることによって、1919（大正8）年にはじめて国産の装丁用クロスの会社が設立され発達が促された。

大正の終わりから昭和の初期には、大震災からの復興や金融恐慌もあり、出版界も不況に襲われていた。そこに改造社の『現代日本文学全集』が1冊1円という安価で登場し、円本と呼ばれて大ヒットした。それにより各社による円本合戦に突入し、このブームが日本の国産ブッククロス技術の発達を大きく促すことにもなった³⁾。

その後、円本は廃れていってしまうが、その円本ブームの中で時流におもねることなく手作りの限定版や豪華本の刊行を試みる出版社も多く存在し、数々の趣向を凝らした本を生み出していくこととなる⁴⁾。「はじめに」でも名前の挙がった齋藤昌三の「書物展望社」もそのような出版社のひとつであり、いわゆる「ゲテ本」と呼ばれる特徴のある限定本を刊行していくこととなる。

2 齋藤昌三の「ゲテ本」

「ゲテ本」とは、齋藤昌三の著作や、齋藤が装丁を担当した異質な装丁の本であり、その由来は、民俗学者の柳田国男が「下手もの趣味も爰まで来ては頂上だ」といった評をしたことである⁵⁾。齋藤昌三は自身の関わった本以外にも

「ゲテ本」「ゲテ装本」という言葉を使用しているが、本稿では齋藤昌三の関わった資料を指すものとする。齋藤昌三は1887（明治20）年、座間に生まれ、茅ヶ崎を終生の住まいとした人物である。書物研究家、編集者、随筆家、装丁家として活躍し、茅ヶ崎市立図書館名誉館長にも就任している⁶⁾。「ゲテ本」はその素材の特殊性などから限定本が多く希少なものであるが、当館の草創期の整理課長（後に資料課長）沓掛伊左吉の著作「収集家の悲哀」（『沓掛伊左吉著作集』所収）によれば、沓掛との交流を通じ、齋藤本人から自身の蔵書の一部や装丁を手がけた資料が当館に寄贈されたようである⁷⁾。

このような経緯で当館には齋藤昌三関連の資料が所蔵されているのだが、まずは、その「ゲテ本」と呼ばれるほど異質な装丁の資料から紹介していく。

①『紙魚繁昌記』『紙魚繁昌記 続』内田魯庵著 書物展望社 1932、1934
<020.4/4、020.4/4/2>

2冊とも酒絞り布袋装で、1冊目は限定500部⁸⁾である。見返しに本物の虫食いがある古文書を使用し、そこへ紙魚を銀色で印刷してある。内容で酒樽の書齋の風流が紹介されていたところからヒントを得た装丁である。酒をしぼる酒袋の多くは麻又は木綿織りで柿渋がひいてあり、強靱で、防虫上も有効な物である。見返しに銀の紙魚を印刷したのは「廃紙の利用のみでは、後日或は補損用に使用した位に誤解されぬとも限らぬ」などの装丁に関する記述が「装釘自費」（『齋藤昌三著作集 第三巻』所収）に見られる⁹⁾。

2冊目の『紙魚繁昌記 続』は限定1,000部で見返しには虫食いの古文書はなく、『日本之少年』という雑誌上で挿絵として使われたものが刷られている。

②『銀魚部隊』齋藤昌三著 書物展望社 1938<020.4/10>

550部刊行（A版（1～30、識語署名入）、B版（31～500、署名入）、家蔵版（501～550）¹⁰⁾のうち436番のもの。天保期の友禅染の型紙を使った装丁で、

その型紙を表紙にする前に二枚の紙に柄を刷り出して見返しに使用した。全冊が一冊毎に異なった柄になっている。また表紙に絵紙の一片や切手が付されているのは、単調になってしまうので多少の色彩を添えるために使用したとの記述がある¹¹⁾。当館所蔵本は絵の一片が付されている。

③『閑板書国巡禮記』 齋藤昌三著 書物展望社 1933<020.4/17>

限定1,000部¹²⁾のうち237番のもの。蚊帳を表紙に使用している。蚊帳の後ろには齋藤昌三の姿を影絵としたものと、右上には洋画を掲げてある。背から裏表紙は夜をイメージし、それにちなんで天銀(天金の銀箔版かと思われる)としている。見返しは光明色の和紙を使用し、表紙との陰陽をつけている。また見返しには、蔵書票及び蔵書印が印刷してあり、これは洋の東西を加味した選出になっている。

④『書痴の散歩』 齋藤昌三著 書物展望社 1932<020.4/29>

限定1,000部¹³⁾。古い番傘を剥いで外装にした番傘装である。油を引き直し更に柿渋で落付きをつけている¹⁴⁾。左上にある印は齋藤昌三の定紋。当館所蔵のものには使用されていないが、一部には背に番傘につきものの頭紙を使用しているものもある。天金が施されており、また見返しは明るい和紙の地色に銀線の雨を降らしている¹⁵⁾。「雨傘は捧げられた者の爲めに雨水を凌いで、御用を果たした揚句は屑屋の荷厄介にされるものだし、少雨荘(齋藤昌三の号)の名にも因縁あるもの、こんな物こそ、自分の著書には適した晴衣だと試みて見た。」と本文に記述されている。

⑤『紙魚地獄』 齋藤昌三著 書痴往来社 1959<020.4/31>

限定300部¹⁶⁾のうち74~295番にあたる並製版である。装丁は峯村幸造が担当している。見返し用紙には柳瀬定吉漉の越前産二色模様漉透マーク入特漉鳥の子紙を使用しており、『書痴の散歩』の表紙にもあった齋藤昌三の定紋が薄く透けている。表紙の半分から裏表紙にかけては法衣を使い、裏表紙は法衣を透かして銀の題字が見えるようになっている。また、この本の一番特徴的な

部分として特殊印刷香料を使用しており、本文には放香期間が一ケ年と記載されているが、50年以上経た現在でも芳香を放っている。香りは麝香であると内容見本に記述があるらしい¹⁷⁾が、現物は確認できていない。

⑥『書物の美』 齋藤昌三著 青園荘 1962<020.4/41>

限定150部のうち125番のもの。齋藤昌三の遺作である。紺紙に金泥という絵具でお経が書かれた表紙になっており、背と角には金欄織(一部銀にも見える)が使用されている。天金が施されており、見返しには少雨叟印が押されている¹⁸⁾。本文には和紙を使用している。齋藤昌三の没後に出版されているので、装丁などについては本文中に記載がない。



写真1 ⑥『書物の美』

⑦『書斎の岳人』 小島烏水著 書物展望社 1934<049.1/84>

限定980部¹⁹⁾。天金が施されている。背に信州産の蓑虫を使用し、細いものをひし形に縫い合わせている²⁰⁾。1冊に30匹ほど使用され、合計で3万匹ほどの蓑虫を採集したという²¹⁾。平には南洋産樹皮が使われており強靱な装丁に仕上がっている。背に金箔押しタイトルがなかなか定着せず、入れるのが難しかったようである²²⁾。



写真2 ⑦『書斎の岳人』

⑧『書淫行状記』齋藤昌三著 書物展望社 1935<049.1/314>

初刷 500 部²³⁾のうち 258 番のもの。黄漆装、それも研出布目塗という技法で布目を表すように塗られたものである。背のタイトルは金箔押しになっている。背の角に苦労したとの記述が見られる²⁴⁾。

⑨『退讀書歴』柳田国男著 書物展望社 1933<380.3/1>

限定 1,000 部²⁵⁾のうち 870 番のもの。民俗学的内容に合わせ、民俗的な製品の方が良いとの考えから²⁶⁾一本も同一の柄のない山形地方のつづれ織を使用している。背には革が使用されている。また、柳田国男の若いころの住まいを見返しの絵としている²⁷⁾。

⑩『杯洗の雫』湯朝竹山人著 書物展望社 1934<768.5/20>

小唄研究家の歌謡随筆集である。表紙に三味線を包む縞木綿の風呂敷を使用し、猫皮を三味線の胴の形に打抜いてそこに題名が刷り込まれている²⁸⁾。

⑪『魯庵随筆読書放浪』内田魯庵著 書物展望社 1933<914.6/1250>

当館所蔵の普及版は特殊な薬品を使った古い日刊新聞を表紙に使用²⁹⁾。同一の表紙がないものに仕上がっている。先に発売された限定版(1,000部)は染布袋入り、和紙に目次を印刷して袋に貼り、「書物展望社蔵版、白木屋調」と白く染抜く。背には革を使用しており、平は布で、蔵書票を箔押し、見返しに魯庵自筆原稿を縮小して印刷して、魯庵の名刺が貼られている³⁰⁾。

以上、紹介した資料が、当館が一般図書として所蔵している齋藤昌三の「ゲテ本」である。「かながわ資料／新聞雑誌室」にも齋藤昌三関連の資料があり、そちらもかなりの「ゲテ本」であるので機会があれば紹介したいと考えている。

3 特徴的な装丁の資料

当館には、齋藤昌三の「ゲテ本」以外でも特徴的な装丁の資料は数多くある。豪華であったり、凝った材料を使用していたりと特徴的な部分はさまざまであ

る。この章では、今回見つけることができた特徴的な装丁の資料を紹介していく。なお、掲載順は当館の請求記号順とした。

⑫『本の革の話』小林栄一郎著 小林栄商事 1969<022.5/6>

本文で羊革より耐久力があると記述されている山羊革を装丁に使用している。タイトルは金箔押しであり、また天金を施されている。巻末には羊革が6枚(1枚ははがれてしまっている)、山羊革が2枚の装丁皮革見本が付いている。装丁用の革、特に「皮革の知識」に主点を置き、「皮革の随筆」「皮革の要語」「皮革の歴史」などについて記述されている。

⑬『湯島天神誌』湯島神社編 湯島神社 1978<175.9/69>

表紙は西陣織で、お守りの袋などを作成している京都奉製が作成したもの。天金を施されている。

⑭『大隈侯八十五年史 別冊』大隈侯八十五年史編纂会編 大隈侯八十五年史編纂会 1926<289.1/28/4>

表紙には『風雲偉観』というタイトルがあるが当館の書誌情報に準じた。大和綴じで四方金になっている。表紙は布装で金糸が織り込んであり、扉の図案(稲穂)が空押しされている。題字の布は絹だと推測され、これも縁に金箔を使用している。

⑮『民俗芸能全集 11 上中下』山内盛彬著 民俗芸能全集刊行会 1966<385.7/5/11>

限定 20 部。蛇皮が使用されており、題字は金箔押しになっている。内容は三線の楽譜である。元となる本は、琉球最後の国王尚泰が制定したもので、4部作られ、欽定楽譜野村風工工四(工工四とは三線の楽譜の事。)と呼ばれた。多くの欽定楽譜は戦災により失われたが、著者が持っていた



写真3 ⑮『民俗芸能全集 11 上中下』表紙の一部

1部を20部限定で復刻したものが当館所蔵の本である。三線では犬猫の皮を使う三味線とは違い、蛇皮を用いることから本資料にも蛇皮が使われている。

⑩『鳳闕』上野竹次郎編 奉效會 1924<526.2/3>

当館所蔵のものは第二版である。金色唐草文絹で表装して、縁を金で箔押しされた額に書名が入っている。見返しは金砂子散しになっている。四方金でもあり、どこから見ても金色な贅沢な一冊である。中身は皇居等の写真集であり、1924(大正13)年に天皇皇后両陛下と皇太子同妃両殿下に披露された旨の文書の書影がある。

⑪『第二次世界大戦艦船遺柱総覧』公益推進機構出版部編 公益推進機構 1974<556.9/5>

背には革を使用しており、小口等は三方金になっている。背の革の種類の記載はないが、合皮だと思われる。昭和59年刊と比較的新しいものだけあってきれいな三方金を見ることができる。

⑫『わたしは合成紙 増補改訂版 4版』井上啓次郎著 日刊工業新聞社 1970<585/24>

全て合成紙で作られ、耐水性のある資料である。当館で所蔵しているのは増補改訂版となる1970(昭和45)年の第四版である。第四版では軽量化などもあり、合成紙の種類が変えられている。1968(昭和43)年に科学技術庁資源調査会の「合成紙産業育成に関する勧告」が出され、翌年1969(昭和44)年に第一版が出された。内容では今後の合成紙の可能性などを挙げ15年後の合成紙の普及についても記述されているが、2度の石油危機による石油の大幅値上げと経済停滞による用紙需要の低迷により合成紙は大きな打撃を受けて、記述されているほどの広がりには起らなかった³¹⁾。

⑬『幻しの紙』則武三雄著 北荘文庫 1973<585.6/15>

限定300部。和装本だがよくある四目綴じではなく、康熙綴じである。表紙は黒に近い紺紙に柿渋引きをしたもの。題箋には鳥の子に金箔小片のあるもの、見返しには鳥の子雲母引きの紙を使用している。扉は鳳凰透入りの溜漉であり、本文にも鳥の子雲母引き、『好色一代男』西鶴本の青い表紙の再現、正倉院式麻紙などを使用している。標本紙として福井県無形文化財のうちぐも(打雲)、中国古紙(康熙年間)などの手漉和紙14点が付いている。手漉和紙の魅力を語ったエッセイ集である。

⑭『日清食品50年史 創造と革新の譜』日清食品株式会社社史編纂プロジェクト編 日清食品 2008<588.9/111/2>

創業時のチキンラーメンのパッケージを再現している。専用の袋がパッケージに、ブックケースはインスタント麺になっており立体感をもたせる印刷が施されている。中身は創業者の伝記、50年史、DVD版50年史の3分冊になっている。DVD版50年史のケースは開くとポップアップになっており、編者の「手に取っていただいた瞬間、「おお！」という驚きの声上がるようなものを作ろう」という思いの通りの装丁である。



写真4 ⑭『日清食品50年史 創造と革新の譜』袋とケース

⑮『アンリミテッド：コムデギャルソン』清水早苗、日本放送協会編 平凡社 2005<589.2/135>

本の中身はNHKの番組を書籍化したものであり、使用素材も普通のもの。しかし、表紙デザインは少々変わっている。表紙、カバー共に赤と白(透明)の細かい横縞、題字は青と白(裏表紙は濃い赤と白)になっており、その線も平

行ではなく微妙にズレているので、見る角度で見える色が変わる。またカバーが大きく、余裕のあるものであるため、触れることでも色が変わって見える。

②『宇宙の旅 Space odyssey』逢坂恵理子編 水戸芸術館現代美術センター 2001<702. 07/148>

宇宙に関する美術展の図録。とくに装丁に関する記載はなく、アルミ系の用紙に PP 加工を施したもののように見えるが、詳細は不明である。光の反射により虹色に輝く装丁をしている。他にも数冊同じような加工の書籍を見つけることができたが、一番きれいに反射しているこの書籍を代表として選んだ。

③『稿本日本帝國美術略史』東京帝室博物館編 日本美術社 1908 <702. 1/312>

1900年のパリ万国博覧会に出された『Histoire de l'Art du Japon』の和文版(1901)を再版(1908)したもの。装丁に関しては東京文化財研究所の所蔵目録紹介に「明治41年(1908)に日本美術社より復刻再刊された(隆文館発売)絹表紙の豪華装丁版である。」とある³²⁾。背と角は白、平は黄色の絹で、三方金が施されている。表紙裏表紙共に刺繍がされ、見返しも絹を金箔で飾ってある。

④『前衛の道』篠原有司男著 美術出版社 1968<702. 16/7>

美術家・篠原有司男の著作である。表紙がレンチキュラー法を用いた印刷になっていると思われる。昔、お菓子のおまけなどで、見る角度によって絵が変わる表面の凸凹したカードがあったことを覚えている人も多いであろうが、表紙がそれと同じ印刷になっており、こちらも見る角度によって大きく色が変わる。

⑤『ヴァチカン壁画』バティカン美術館編 講談社 1966<720. 8/11/1>

限定1,500部のうち276番のもの。42cmとかなり大きい本だが赤く染めた一枚のインド産羊皮で装丁が施されている。

⑥『瑩山禅師御遺墨集』紹瑾著 大本山総持寺 1974<728. 2/105>

曹洞宗瑩山派の派祖瑩山紹瑾の真筆をまとめた本である。折本になっており、背がないため四方全てに金を施してある。表紙は寺紋である五七桐紋をあしらった布装で落ち着いた色合いになっている。別冊で和装の解説も付属しているが、どちらの装丁についても言及はされていない。

⑦『写真の誘惑』国立国際美術館企画・監修 国立国際美術館 2012 <740. 4/142>

書名と同タイトルの国立国際美術館の開館35周年シンポジウムの記録である。表紙にインクを使っておらずタイトル等も空押しを用いている。空押しされているのはタイトルだけではなく、小さい文字で文章が並べられている。空押しは細かい文字などの加工が潰れてしまうことも多く難しいはずのだが、とくに潰れているようには見えない。遠目に見ると真っ白な表紙だが、近くとタイトルや文章が見えるようになっている。

⑧『大亜細亜』倉田精二写真 アイピーシー 1990<748/565>

装丁に関する記述を見つけることはできなかったが、麻を編んだような表紙に題紙も麻紙のような粗さの目立つものを使用している。

⑨『百選会百回史』飯田鉄太郎、野村悟共編 高島屋本社業務部 1971 <753/154>

百選会は呉服染色の新たな意匠の創作及び発表の運動に対する機関として1913(大正2)年に生まれたものだが、その百選会が百回を迎えた記念誌を、高島屋140周年記念の際に刊行したもの。表裏両面透明なプラスチックに覆われ、背は革張りになっている。表紙は第百回春の図案で、裏表紙は第百二十六回秋の訪問着(一部)とあるが、それぞれ透明のプラスチックから透けて見える内側の部分であろう。表紙の春の図案は、元が油絵なのか、エンボス加工のようなもので凹凸を再現してある。

③⑩『綵霞帖』岸本景春編 芸艸堂 1929<753.8/194>

推古時代から徳川末期まで様々な時代の優秀な裂地（織物）を原色複製版で掲載している資料である。大和綴じで、表紙は天平時代文様を手染めされ刺繍も施されている。紐は藤原時代組紐模が使用され、見返しは足利時代金泥文様になっている。

③⑪『^{たがねのはな}鑿酒花』1～4、続1～2 光村利藻編著 鶴書房 1971<756.6/184>

当館では複製版を所蔵している。著者の光村利藻は光村印刷の創始者であり、父は海運業などで巨富を築いた光村弥兵衛である。利藻は古美術などの写真撮影に少年時代から熱中しており³³⁾、そんな著者が資財を放出して蒐集した近世彫金工の粋を網羅した一大図録集成である。5巻までの刊行に17年を要し、以下は未刊に終わった（複製では刊行されている）。図録考証には専門家を動員し、「一枚の譚を入手するために特別臨時列車を仕立て、名妓や芸人まで同乗させて金沢市へ乗込んだという逸話もあるほど」³⁴⁾で、装丁も特別に織らせた豪華本となっている。初版は当時の一流政界人に寄贈された。

当館で所蔵している複製版は、表紙織布、金糸で刺繍、黒糸でタイトルを刺繍されている。三方金が施され、大和綴じになっている。また紐は飴色で滑らかなものであり、表紙も厚く柔らかい触り心地になっている。見返しは金箔が漉き込んだ紙で、金箔の量も多いように見える。

③⑫『ダンス元年』中川三郎著 劇場コーパ 1977<799/4>

五角形の本である。表紙、裏表紙のみが五角形で他は普通の四角形になっており、この本を開くと外側の表紙裏表紙がそのまま書見台として機能するというアイリーン・チャールズ・コリン創案の装丁である。おそらく合皮であるが、革の表紙に金箔押しの書名が入っている。内容は鹿鳴館以降の日本の社交ダンスの歴史について舞踊家の中川三郎が著したものである。



写真5 ③⑫『ダンス元年』

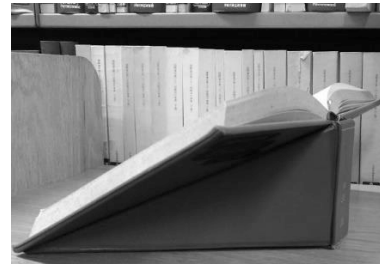


写真6 ③⑫『ダンス元年』本を広げた状態

③⑬『俳諧深川集』酒堂編 <911.33/18>

『書物の美』には「宝暦二年の『俳諧深川集』は、微細な青貝を漉き込んだ表紙だが、素人目には一寸解らない」との記述がある³⁵⁾。当館所蔵のものは刊行年不明のため齋藤昌三の述べている装丁と同じものかは分からないが、表紙に貝殻が漉き込まれている点は同じであった。ただし、当館所蔵本は素人目でも貝が漉き込まれているのがよく分かる。

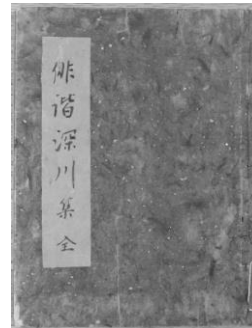


写真7 ③⑬『俳諧深川集』

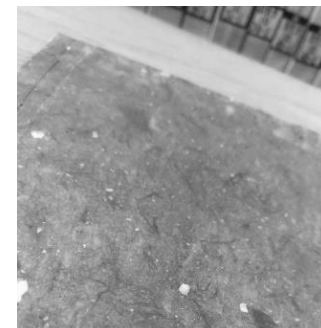


写真8 ③⑬『俳諧深川集』白いところが貝殻

③⑭『三四郎』夏目漱石著 春陽堂 1909<BS1909/2>

橋口五葉の手による装丁である。表紙は雲母引き寒冷紗で、見返しはコットン紙に砂目石版刷りである。見返しの模様は菱形の中に蜂とタンポポをデザイン化したものが連続しており、色は橙色の濃淡を使っている³⁶⁾。当館所蔵本は劣化で確認できない箇所も多いが雲母引きされているのが背などで確認できる。

③⑤『春琴抄』谷崎潤一郎著 創元社 1933<BS1933/3>

著者の谷崎潤一郎自身による装丁（デザイン）とされている。平は黒一色の漆塗りに、金箔押しでタイトルが入っている。背には布が使用されている。また、当館では未所蔵だが、「朱色漆塗り本」数十部や2, 3部の特装本も作られた³⁷⁾。非常に美しい見た目であるが、見返しの薄さや、ボール紙使用による強度の低下など造本に難がある部分もあり、批判されることも多い一冊である³⁸⁾。

③⑥『The Holy Bible』British and Foreign Bible Society London British and Foreign Bible Society <Y193/4>

布クロス装の表紙、裏表紙に木の板が付けられており、その中に土と水が入っている。表紙の水には「JORDAN WATER NAZARETH」、裏表紙の土には「HOLY EARTH NAZARETH」とそれぞれ記されているので「ヨルダン川の水」「ナザレの土」が封入されているものと思われる。扉には「HAND MADE in the HOLY LAND NAZARETH」というスタンプが押されている。

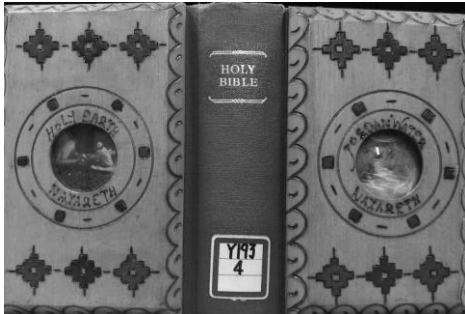


写真9 ③⑥『The Holy Bible』向かって左が土、右が水

おわりに

以上のように特徴的な装丁の本について簡単な紹介を行ってきた訳だが、今回紹介することのできた本の他に、使用されている材質に見当が付かなかったため紹介できなかった資料や、かながわ資料に含まれるため紹介の対象ではなかった資料などもある。さらには、今回の調査で見つけることのできなかつた資料もまだ眠っているだろうことが予想できる。今後、資料に触れる中で装丁的に見るべき点があるものには留意し、ある程度まとまったところで紹介でき

ればと考えている。

装丁に関するデータは、奥付に記載がないため書誌情報にも入力されていないものが多く、コレクション化も難しいので一般の利用者が探そうとしても容易には探しだせない。また、写真で見ても伝わりにくい資料も多いため、デジタル化しても装丁を見る点での恩恵は少ない。今回、全てに写真を入れなかった理由も、この図版での伝わりにくさにある。しかし、装丁に興味を持つ人は少なくないはずであり、本稿が普段見つけることのできない、当館所蔵の様々な装丁の資料に触れる一助となれば幸いである。

用語の解説 (50音順)^{39) 40)}

■エンボス加工【えんぼすかこう】

紙を雌型と雄型の間にはさみ、加圧して文字や絵柄を浮き出させる加工のこと。

■折本【おりほん】

長く継ぎ合わせた紙葉を、一定の幅で交互に折りたたんで考案されたのが折本である。中国では、唐・宋時代に盛んに行われ、特に仏教書はほとんどこの形式の製本に一定した観があったので、この様式を経本仕立てともいう。

■柿渋【かきしぶ】

渋柿の若い果実から搾った汁を発酵させ濾した液で、木・麻・紙などの防水・防腐剤として塗る。

■空押し【からおし】

金箔や色箔などで装飾しないで、凹型のかがみや文字・模様などを押圧して仕上げる加工のこと。

■寒冷紗【かんれいしゃ】

粗く平織りにした薄い綿布を、糊付けして固く仕上げたもの。

■雲母引き【きらびき】

紙面に雲母の粉末溶液を塗布すること。またその加工を施した料紙のこと。

■クロス

装丁用材料のこと。織物を基調とした生地に染色加工を施し、薄紙で裏打ちした布クロス、染色した塩ビを生地に用いたビニールクロス、紙にラミネート加工やエンボス加工した紙クロス、あるいはレザークロス等がある。

■小口【こぐち】

仕上げ断ちされた本の三方の切り口のこと。綴じ側と反対側の切り口（前小口）のみを小口という場合が多い。

■コットン紙【こっとんし】

軽くて嵩のある表面の粗い紙のこと。多く書籍に用いる。

■三方金【さんぼうきん】

天・地・前小口に金箔付けしたもの。

■四方金【しほうきん】

折本や大和綴りなどで四方に本文紙がみえる場合、そのすべてに金が付けられているのをこの稿ではそう記載している。

■紙魚【しみ】

シミ科シミ目の昆虫の総称である。和紙・衣料・穀類などを食害する。

■書見台【しょけんたい】

読書用の台のこと。

■背【せ】

本の綴じ側、前小口の反対側を指す。

■蔵書印【ぞうしょいん】

その所蔵者を明らかにするために書籍に押した印のこと。

■蔵書票【ぞうしょひょう】

書物の個人所有を示すため表紙の内側に貼りつける小型の印刷物のこと。主として欧米で行われ、わが国の蔵書印に相当する。

■溜漉【ためすき】

和紙の手漉き法の一つである。

■地【ち】

本の中身の仕上げ断ちした三方のうち下部の切り口をいう。

■天【てん】

本の中身の仕上げ断ちした三方のうち上端の切り口をいう。「頭」ともいう。

■天金【てんきん】

天のみに金箔付けをしたもの。

■特漉き【とくすき】

使用目的に合わせて、特別に紙を漉くこと。また、その紙のこと。

■鳥の子紙【とりのこがみ】

雁皮・ミツマタを主材料とした上質の和紙で、鶏卵の殻のような色をしていることからそう呼ばれている。

■箔押し【はくおし】

器物・布・紙などにのりを置いて金銀箔や色箔を押し、文様や文字を表すこと。

■PP加工【ピーピーかこう】

ポリプロピレンフィルムを貼り、光沢や耐水性を持たせる加工のこと。

■平【ひら】

表紙の背、小口以外の部分のこと。

■ボール紙【ぼーるがみ】

藁を原料とする厚い紙のこと。

■ポップアップ

絵本などにある、開くと絵が飛び出す仕掛けのこと。

■麻紙【まし】

麻布または麻の繊維を漉いて作った紙で、古代には貴重な紙とされ写経や重要文書に用いられた。

■見返し【みかえし】

書籍の中身と表紙をつなぐために表紙の内側に貼る紙のこと。

■溝【みぞ】

板紙を芯にした表紙を開きやすくするために、平と背の境目にある溝の部分のこと。

■大和綴じ【やまととじ】

4ヵ所を目打ちで穴をあけ、2本のばら糸を通して2ヵ所ずつ結ぶ綴じ方のこと。

■洋装本【ようそうぼん】

和本・和装本に対する言葉。装丁などの仕立て方が西洋風である本のこと。現代の書籍は、多くはこちらに分類される。

■四つ目綴じ【よつめとじ】

和本の綴じ方の代表的なもので、本を綴じるとき四穴をあけて、これにとじ糸を通すのでこの名がある。大和綴じと違い背側にもとじ糸が回っている。

■レンチキュラー

人間の視差を利用して、画像を立体的に、また動いているように見せる技術のこと。

■和装本（和本）【わそうぼん（わほん）】

わが国で古くから行なわれている製本の様式のこと。

注および引用・参考文献

- 1) 大日本印刷. “沿革”. 大日本印刷. <http://www.dnp.co.jp/about/history01.html>, (参照 2017-09-25).
- 2) 西野嘉章. 装釘考. 玄風舎, 2000, 291p.
- 3) 庄司浅水. 定本 庄司浅水著作集 書誌編 第七巻. 出版ニュース社, 1982, 336p.
- 4) 庄司浅水. 定本 庄司浅水著作集 書誌編 第十巻. 出版ニュース社, 1982, 332p.
- 5) 齋藤昌三. 齋藤昌三著作集 第三巻. 八潮書店, 1981, 341, 5p.
- 6) 過去のレファレンス情報を参考とした。
- 7) 沓掛伊左吉. 沓掛伊左吉著作集—書物文化史考一. 八潮書店, 1982, 506p.
- 8) 八木福次郎. 書痴齋藤昌三と書物展望社. 平凡社, 2006, 182p.
- 9) 前掲5)
- 10) 前掲8)

- 11) 前掲5)
- 12) 前掲8)
- 13) 前掲8)
- 14) 前掲5)
- 15) 齋藤昌三. 書淫行状記. 書物展望社, 1935, 212p.
- 16) 前掲8)
- 17) 大貫伸樹. “少雨荘隨筆集、香料入印刷『紙魚地獄』、古封筒利用『紙魚供養』”. 装丁家・大貫伸樹の装丁挿絵探検隊. 2009.10.08. <http://d.hatena.ne.jp/shinju-oonuki/20091008>, (参照 2017-10-5).
- 18) 前掲8)
- 19) 前掲8)
- 20) 前掲5)
- 21) 齋藤昌三. 齋藤昌三著作集 第五巻. 八潮書店, 1981, 307p.
- 22) 前掲15)
- 23) 前掲8)
- 24) 前掲5)
- 25) 前掲8)
- 26) 前掲5)
- 27) 前掲15)
- 28) 前掲15)
- 29) 前掲15)
- 30) 前掲8)
- 31) ユポ・コーポレーション. “合成紙の歴史”. ユポ・コーポレーション. <http://japan.yupo.com/product/paper/history.html>, (参照 2017-10-08).
- 32) 東京文化財研究所. “蔵書目録3. 日本東洋古美術関係 和文編”. 東京文化財研究所. http://www.tobunken.go.jp/~joho/japanese/project/catalog003_pict001.html, (参照 2017-10-11).
- 33) 日外アソシエーツ編. 20世紀日本人名事典 そ〜わ. 日外アソシエーツ, 2004, 2817p.

- 34) 前掲5)
- 35) 齋藤昌三. 書物の美. 青園荘, 1962, 59p.
- 36) 岩切信一郎. 橋口五葉の装釘本. 冲積舎, 1980, 230p.
- 37) 橘弘一郎. 谷崎潤一郎先生著書総目録 第二巻. ギャラリー吾八, 1965, 110, 28p.
- 38) 大貫伸樹. 装丁探索. 平凡社, 2003, 303p.
- 39) 日本製本紙工新聞社編. 製本用語事典. 日本製本紙工新聞社, 1998, 443p.
- 40) 松村明, 三省堂編修所編. 大辞林第三版. 三省堂, 2006, 1冊.